

視察研修・研修会等報告書

議席番号 (2) 議員名 (榎 真衣子)

1 年 月 日 令和 6 年 6 月 27 日 (日数 0 泊 1 日)

2 場 所 栃木県庁

3 視察、研修事項

「とちぎ少子化対策緊急プロジェクト」について

- 「とちぎ少子化対策緊急プロジェクト」
 - ・本県の少子化の現状
 - ・課題
 - ・とちぎ少子化対策緊急プロジェクトの全体像 (令 6 事業)
- 令和 6 年度とちぎ男性育休応援事業
 - ・働き方改革応援事業
- 令和 6 年度当初予算案の概要
 - ・とちぎ少子化対策緊急プロジェクトの推進
 - ・G 7 大臣会合を景気とした女性活躍の推進
- 栃木県こども未来推進本部について
- とちぎ少子化対策緊急プロジェクトの進捗状況について

4 面 接 者 栃木県

保健福祉部、生活文化スポーツ部、産業労働環境部

5 視察研修、研修会の成果

とちぎ少子化対策緊急プロジェクトの担当課の執行部の話を聞き、栃木県の少子化の現状など、データに基づく課題設定と県の方針、具体的な事業について理解することができた。

今年度は「とちぎ男性育休推進企業奨励金」事業が 1 事業主あたり 10 万円から 20 万円に拡充され、合計で 9,900 万円 (450 社分) が計上されているようだが、昨年度の実績件数を踏まえると、この予算をすべて使うのはかなりハードルが高いように思うので、矢板市内の事業者にもこの事業を活用してもらえるように、市内で働きかけをしていきたいと思う。

また、県が推進している「とも家事」の考え方には、機械化や外注などにより「家事にかかる時間自体を減らす」という意識啓発の意味も含まれているということがわかったので、「とも家事」の考えが正しく浸透するように SNS 等で発信していきたい。

少子化対策においては、結婚・出産の直接的な支援だけではなく、青年期からのライフデザインが重要だと個人的には考えていたが、県では「若者ライフデザイン支援事業」というのも予算計上されていて、県内の高校においてワークショップを開催するそうだ。今後の実施状況にも注目し、市内でも取り入れられることがあれば実現していきたい。

視察研修・研修会等報告書

議席番号 (2) 議員名 (榊 真衣子)

1 年 月 日 令和 6 年 7 月 22 日 (日数 0 泊 1 日)

2 場 所 煌欄 (川崎ダイス)

3 視察、研修事項

「行政のデジタル化を推進するための人事組織改革」

● ミッション・ビジョン・バリューを整理する

ミッション：WHY 会社が社会のために果たすべき使命や存在意義

ビジョン：WHAT ミッションを実現するために目指す中長期のゴール

バリュー：HOW 社員が取るべき行動指針や判断の軸となる価値観

● 事業と組織は両輪。ビジネスモデルの対となる「カルチャーモデル」が必要

● カルチャーを浸透させ、日々の行動・言動に落とし込むことが必要

● プロジェクト制度とユニット制度の導入

プロジェクト単位だけではなく、「ユニット」(職種単位)の横串の繋がりを
つくる

4 面 接 者

元デジタル庁人事・組織開発最高責任者 唐澤 俊輔氏

5 視察研修、研修会の成果

行政でデジタル化を推進するにあたり、民間人材を登用して行政職員とともにプロジェクトを推進していく際の実例などをもとに、組織の「カルチャー」を浸透させることの重要性について学んだ。

それぞれの組織の「ミッション、ビジョン、バリュー」を明確にし、様々な判断をする際に、たびたび「ミッション、ビジョン、バリュー」に立ち返ること、そしてバリューをもとに意思決定していくことが重要であるということを学んだ。「なぜそのような意思決定になるのか？」を常にバリューに照らして問い続けることによってこそ、組織の「カルチャー」が浸透していく。

組織のカルチャーが浸透することで、現場での素早い的確な判断も可能になる。現場に必要な権限が委譲され、職員が生きいきと働いている市役所の方が、市民サービスも向上すると思う。

また、全庁横断的に物事を進めていく際には、部課長同士だけではなく現場担当同士の「横串の繋がり」も大切だと感じた。

今後、矢板市政の執行状況を確認する際には「組織カルチャーの浸透」「横串の繋がり」という観点も意識していきたいと思う。

視察研修・研修会等報告書

議席番号 (2) 議員名 (榊 真衣子)

1 年 月 日 令和6年8月5日～8月7日 (日数 2 泊 3 日)

2 場 所 千葉市役所
衆議院第一議員会館

3 視察、研修事項

1 日目

- ・千葉市新市庁舎（防災拠点）視察
- ・千葉県知事 熊谷俊人氏 講演
「令和の地方自治のかたち～議員・市長・知事の経験から若手議員に期待すること～」
- ・全国若手議員の会出身 首長トークセッション
（習志野市長、香取市長、四街道市長、境町長）

2 日目

- ・議会改革サミット「取手市・墨田区・登別市の議会改革について」
- ・実業家・CROSS FM 代表取締役会長 堀江 貴文氏 講演
「ホリエモンから若手議員へのメッセージ」

3 日目

- ・初代子ども家庭庁担当大臣小倉まさのぶ衆議院議員 講演
「少子化対策とこども家庭庁」

4 面 接 者 3 に記載のとおり

5 視察研修、研修会の成果

●千葉市新市庁舎視察

東日本大震災を契機に計画された防災拠点としての新市庁舎を視察。災害対策本部のための部屋が非常時だけではなく常設されていること（モニターもたくさん稼働している）、非常用電源のための備蓄の方法、非常用電源コード（赤）の色での区別など、実際に見て触れることで勉強になった。矢板市の新市庁舎整備の審議をする際に「防災」の事例として参考にしていきたい。

●千葉県知事 熊谷俊人氏講演

熊谷知事から「住む場所を決めるのは福祉ではなく『働く場所と最寄り駅からの逆算』でしかない。」「子育て支援は少子化対策にはならない。」など、現実を直視した力強い言葉を頂いた。また知事によれば、「土地があったとき、手っ取り早く儲かるのは、『1. 住宅、2. 物流拠点、3. データセンター』だが、自治体が本当に力を入れなくてはならないのは、行政だからこそ時間をかけてできる『産業の拠点』『研究の拠点』を自分たちの自治体に作ること。『自分のまちに住む理由をつくる』ことが大切」とのこと。

矢板市長の考えにも通ずるところがあると思った。「雇用・経済」を最優先の課題として政策を進めていく矢板市において、熊谷知事のお話も踏まえて長期的な視点で政策提案をしていきたいと思う。

●堀江 貴文氏 講演

堀江氏からは、地域おこし協力隊やふるさと納税の活用について、また政治活動の発信のための SNS の活用についてのお話を伺った。地方が発展するためには、地域おこし協力隊やふるさと納税等の制度を存分に活用していくことが必要だと改めて思った。

「未来は予想するのではなく『つくる』もの。どういう日本にしたいか、自分たちで変えて行く。」という言葉が印象的だった。将来の予測はしつつも、「どういう矢板にしたいか」を考え、いま必要なことだけではなく、未来の矢板市に必要な政策を提案できるようにしたいと思う。

●小倉まさのぶ衆議院議員 講演

前こども政策担当大臣の小倉まさのぶ衆議院議員から、国の少子化対策の基本スタンスについて伺った。国は、こども家庭庁予算を 2030 年代初頭までに倍増していく考えであること、また国の「少子化対策」は「妊娠・出産～成人まで」の全世代を切れ目なく支援していく考えであることがわかった。国としてはあくまでも結婚も出産も個人の希望であり、出生率の目標数値等を掲げることは「ふさわしくない」というスタンスだということには納得したが、「2030 年代に入るまでが少子化傾向反転のラストチャンス」であると言うならば、もう少し「出生」に的を絞った尖った施策が必要ではないかと感じた。国の方針は理解しつつも、「地方だからこそできること」をこれから考えていきたいと思う。

視察研修・研修会等報告書

議席番号 (2) 議員名 (榑 真衣子)

1 年 月 日 令和6年8月27日 (日数 0 泊 1 日)

2 場 所 衆議院第二議員会館

3 視察、研修事項

出産議員ネットワーク・子育て議員連盟 院内集会

●出産議員NW・子育て議連 活動報告と調査等結果報告

●国立国会図書館調査及び立法考査局による解説

「議員の職務と家庭の両立 ―諸外国における議員の育児に係る取組―」

●パネルディスカッション

(パネラー)

江藤 俊昭 大正大学教授

滝本 純生 元自治大学校長・元全国市議会議長会事務総長

櫻井 周 衆議院議員

平神 純子 元鹿児島県南さつま市議会議員

相崎 佐和子 元兵庫県議会議員

佐藤 知一 神奈川県議会議員

佐藤 こと 東京都北区議会議員

4 面 接 者 3に記載のとおり

5 視察研修、研修会の成果

日本における女性議員の出産・育児に係るこれまでの取り組みについて、任期中に出産・子育てを経験した現職・元職女性議員のアンケート調査とインタビュー調査の結果から学んだ。また、イギリスやアメリカ、オーストラリアなどの諸外国の「議員の育児」に係る取組についても、国立国会図書館調査及び立法考査局による解説から学んだ。現在の日本においては、昭和からは改善された点もあるが、諸外国と比較すると制度が整っていない部分も多いことがわかった。議員の出産・子育ての問題は、女性の権利の主張ではなく、地方議会の多様性を保つための「民主主義の問題」であるということ、また、経験者はただ単に「こんなひどいことがあった」と話し合っているだけではなく、現実に制度を作っていくことが必要だというお話が印象に残った。これまで先輩方が苦勞しながら道を作ってきて下さったように、私たちも、次世代が同じ苦勞をしないために制度を作っていかななくてはならない。コロナ禍でオンライン会議等も当たり前になってきた今は、会議の「出席」の仕方を考え直すチャンスだと思う。出産や育児のためだけではなく、療養や介護など様々な事情をもつ方々の多様な意見を取り入れていくために、矢板市に必要な制度改正について今後も考えていきたいと思う。